

「捨ててください」とは言わせない！  
～酪農家を目指す私に今できること～

北海道剣淵高等学校 総合学科 2年 小泉 天花

『残った牛乳は、持ち帰らないで必ず捨ててください。』給食の終わりに、担任の先生から指導されるこの言葉を聞くたびに私の胸は痛くなります。小学生の時も、中学生の時も、高校生となった今も、給食終わりに担任の先生から指導されるこの言葉が大嫌いです。

私の家は、北海道北部の士別市南士別で搾乳牛約71頭、育成牛約60頭を飼育する酪農家です。父と母、外国人技能実習生の3人で繋ぎ飼い牛舎の牛を管理しています。

牛舎では、毎日牛の鳴き声と父と母の大好きなノリノリの音楽が流れ、その中で父と母がいつも一緒に楽しそうに働く姿があります。幼少の頃は、その牛舎が私と弟の遊び場で、学校に通うようになってからは、搾乳の手伝いをしながらその日の出来事を話すコミュニケーションの場でもあります。家族がいつも一緒に笑いが絶えないそんな環境で育った私は、いつしか「両親と一緒に酪農家として働きたい。」と考えるようになり、高校進学も家の手伝いができて農業が学べる剣淵高校に進学しました。

1年次の3月、課題研究の授業で卒業生の講話を聞く機会がありました。その中で北海道立農業大学校畜産経営学科に通う一人の先輩が「実家の酪農業を継ぐために進学したけれど、卒業を前に廃業してしまいました。酪農に携わる仕事がしたいので家畜の飼料を作る会社に就職することになりました。」というお話がありました。私も家が酪農家なので、ここ数年飼料代や肥料代が高騰していることや、子牛の価格が下落していること、消費者の牛乳離れなどによって、多くの酪農家の経営が厳しいことは知っていました。しかし、まさかこんなにも身近に廃業した酪農家さんがいるとは思いませんでした。

「私の家の経営は大丈夫なのか？」私は心配になって両親に話を聞くと、「酪農家にとって厳しい時代だけど、今のところ廃業する心配はないよ。」と言われました。両親と話をする中で、わが家の経営は、平成13年に地域の酪農家 22 戸とともに「デリーサポート士別」を立ち上げ、飼料作物の栽培管理・収穫・調製及びTMRまで一貫して行っていて、そこから飼料を100%供給していること。そして飼料作物の栽培に関わる農業機械を持たないため、機械購入や維持にかかる経費をなくしたことが大きな強みとなっていることを知りました。

しかし、このまま厳しい状況が続けば、酪農業界全体が衰退し国内での牛乳確保が難しい状況になっていくことが予想されます。そして、我が家の経営だって、今は大丈夫でもさらに厳しい状況が続けば廃業に追い込まれることだってゼロではありません。『私自身で何かできることはないか？』そう考えた時、真っ先に思い浮かんだのは、給食の終わりに先生から言われるあの言葉『残った牛乳は、持ち帰らないで必ず捨ててください。』でした。両親や酪農家さんが大事に育てた牛から生産された牛乳が、飲まれることなく生徒の手で手洗い場に流されていく現状を改善できないか。身近な学校給食から牛乳の消費拡大ができないか。私の挑戦が始ま

りました。

まず、私は学校で残される牛乳の本数や飲まない人の理由について、各担任の先生にお願いし、調査しました。クラスによって残される牛乳の本数は、日によって1～6本と違いはありますが、飲まない理由については、大きく2つ「牛乳嫌いな人」と「飲みたくても飲めない人」がいることがわかりました。私は、授業の中で「牛乳を飲んでお腹を壊す人の多くは、乳糖が原因であること。」「乳糖は加工することにより、乳酸菌などに変化すること。」「牛乳は加熱料理や加工品にしても、栄養価が変わらないこと。」を学び、牛乳を飲みたくても飲めない人には、牛乳そのものの提供ではなく、料理に使用することで、牛乳の消費拡大に繋がるのではないかと考えました。実際、総合実習の授業で先生にお願いし、給食で残った牛乳を集めて牛乳プリンを作り、普段牛乳を飲まない友人たちに試食してもらいました。試食した友人たちからは、「おいしい。」「飲むよりもこっちの方がいい。」との感想をもらうことができ内心ホッとしました。この取り組みをとおして、牛乳を原材料として献立に取り入れることで、飲みたくても飲めない人への摂取が可能であることを実感しました。

後日、小学校の栄養教諭の先生と話の中で牛乳の廃棄に対する自分の思いや酪農家の現状、私のこれまでの取り組みを紹介させていただきました。栄養教諭の先生からは、「牛乳料理を献立に加える取り組みを是非、やってみましょう。あわせて酪農家さんの現状や牛乳の魅力を伝える機会もつくりましょう。」と仰っていただきました。今後は、栄養教諭の先生のご協力のもと、私が考案する牛乳をたっぷり使用した献立を給食のメニューとして出していただけの予定です。まずは、地元の給食から、私の牛乳廃棄ゼロそして牛乳の消費拡大に向けた小さな一歩がスタートしました。

酪農家にとって、これからさらに厳しい時代が来るかもしれませんが、「両親と一緒に酪農家として働きたい。」と言う私の夢は決して諦めません。厳しい時代であっても、経営が改善される糸口がどこかに隠されているはずです。私はこれからも牛乳の消費拡大に向けた活動を続け「牛乳の素晴らしさを伝えることができる酪農家」になります。

もう、「牛乳を捨ててください。」とは言わせない!